

学位論文内容の要旨

		要 旨
学位申請者	<p style="text-align: center;">石井 久美子 【比較社会文化学専攻 平成24年度生】</p>	<p>本論文は、大正期『中央公論』の外来語の実態について、語彙・表記の観点から研究を行い、外来語としての受容と定着のあり方を示すことを目的としている。</p> <p>まず、品詞と語彙の観点からは、固有名詞が最も多く、それに関連する文化名を中心とした意味領域の広がりが見られる。一方、一般名詞では、時代が下るにつれて抽象度の高い語が増え、慣用句のように定着の進んだ語が見られる。</p> <p>そして、表記は漢字からカタカナへの変化が見られるが、固有名詞では漢字を含む表記が、一般名詞ではカタカナを含む表記が優勢であることが明らかにされている。国名表記では、略称も含めて分析をすることで、地域により多用される表記が異なっていることも指摘された。全体では、13種類の表記形式が見られ、字種ごとに役割があり、それらが組み合わせることによって、外国語を受容していることが明らかにされている。</p> <p>混種語は、日本語化の指標であるといわれてきたが、外来語＋漢語の形式が最も多く見られ、造語力の高い漢語との結びつきによって、日本語の語法に取り入れられているとする。固有名詞も一般名詞も略称を含む混種語が見られ、それらは、略称でも理解される形であったこと、そして、それが和語や漢語と結びついて混種語になっているという点で、最も定着が進んだ形での使用であることなどが指摘されている。</p> <p>以上の分析考察から、大正期の『中央公論』に見られる外来語は、カタカナを中心に、バラエティに富んだ表記によって受容されており、それらの表記形式は外国語受容のパターンとして定着していることが明らかにされた。さらに、受容された外来語は、慣用句となり、略語で用いられ、あるいは混種語となるなど、形を変えて、日本語として定着していると結論づけている。</p>
論文題目	大正期『中央公論』の外来語の語彙・表記研究	
審査委員	(主査) 教授 高崎 みどり	
	教授 佐々木 泰子	
	教授 大塚 常樹	
	教授 荻原 千鶴	
	教授 伊藤 美重子	